「映画のなかのきのこ」講演会　感想文

菊乃

きのこは、フィクションのネタとしてとても便利な存在だ。

色も形も、生育環境もさまざま。植物のようで動物としても扱えて、美味しかったり、猛毒だったり、キュートなマスコットだったり、恐ろしい怪物だったり。つい先日も、行き過ぎた文明と愚かな人間により滅びかけた星を熱的死に導くキノコ的生物の出てくるアニメを見たばかり。それは核さえも分解してしまうモンスターというおきまりの菌類キャラクターではあったが、優しげで、どこか神々しくさえあった。

そんなふうにきのこが扱われるのは、身近でありながらとにかくよくわからない存在であるからだと思う。じっさい、知ろうとすればするほどきのこはよくわからなくなる。今回の講演会(2017 年 9 月 23 日千葉県立中央博物館にて飯沢耕太郎、扇千恵両氏を講師として行われた「映画のなかのきのこ」講演会)のなかで紹介された映画のなかのきのこたちも、みな得体の知れないものたちだった。

たとえば『シュワンクマイエルのアリス』のきのこは、裁縫道具のなかの木製品なのに、食べられる魔法の薬だった。『ミツバチのささやき』ではふつうの食材からヒトの世界とは違う森の象徴へと変化し、『真夜中の弥次喜多』ではあの世へ去ったものへの想いを媒介する場所にけばけばしく生えている。『マッシュルーム』に至っては、コメディでありながら人間の禁忌のもうひとつ先へ行くモノに。

そして『マタンゴ』。ホジスンの原作では寒々しい暗い印象のあった作品が、極彩色で享楽的な南の島を舞台にした、怪物たちのユートピア談に。現世の欲にまみれていたはずの俗人たちが、「おいしいわァ」などと言いながら社会から隔絶した島のきのこ人間に変化してゆく。

それらのきのこたちは物語のなかでも悪でも善でもなく、むしろそんな固まった価値観を変えるためのアイテムであったりもする。劇中でそれに納得出来るかどうかという事は問題ではなく、超越した神やカッコイイ英雄でもなく、単なるきのことしてそれを為す。観客はそれをそのまま受け入れるしかない。

たぶん、これらの物語を面白がることができるのは、そうしたものを相互理解や共感などとは関係なしに好きになってしまった者だ

ろう。支配するなんてとんでもない、けっしてわかりあったりすることもない、それでも大好きなのだ。

物語のなかの、映画のなかのきのこは、未知への憧れを手軽に可愛らしく表現できる。未知への憧れとはじつに壮大なロマンそのものだが、宇宙や深海などに挑戦しなくても、傍らにひっそりと咲いているきのこに気付くだけでいい。きのこと付き合うことはすでに冒険だ。

そして、どうやら私もそんな憧れに取り憑かれているんだと、この講演会を聞きながら思った。とうにマタンゴになっていながらマタンゴの楽園を追い求め続けていて、創作物に、現実に、今日もきのこを探している。それはすばらしく愉しい。

(注)講演会ではここであげた作品以外にもいくつもの映画が紹介されました。また、筆者は『マタンゴ』『シュワンクマイエルのアリス』『マッシュルーム』のみを最近通しで観たので、他の作品については解釈違いがあるかもしれませんが、どうぞお許しを。